

語り手の創生

矢口 裕 康

Cheating storytellers of folktales through education

YAGUCHI Hiroyasu

キーワード：昔話研究 保育者養成 保育 語り手 月刊保育絵本

1. 昔話研究と保育者養成

昔話研究を40年余り前、野村純一先生（國學院大學）に師事し着手した。その当時、日本文学研究者からは「昔話は、文学研究の対象ではない」、民俗学者からは「昔話の聞き書きは、研究資料価値としてはどうなのか」と言われ続けた。40年前の私自身も、その渦中にいた。

文学は、書承文芸（記載文芸）と口承文芸（伝承文芸）からなる。書承文芸とは、『万葉集』『古事記』『源氏物語』等、文字で記載された文芸で、昔話は口承文芸の一つである。かつて文字を書けるのが一般的でなかった時代、人々は音声言語で語り伝えることを基本としていた。その原点へとつながる口承文芸を研究すれば、「人間が、なぜ文学を必要としたのか」を解明できると思っただけで、40年余りである。それゆえ、学生時代は、語り手が語る一言一句を、忠実に記録することに拘っていた。これを、〈採話〉と表現する。いわゆる、昔話調査者が語り手から採集、聞き書きをした昔話である。この〈採話〉を原話とした〈再話（児童文学作家が、採話を基に再創作・再創造した昔話）〉も、昔話資料集が多数刊行される中、盛んになっていった。その当時、児童文学作家が、昔話調査者が聞き書きした昔話に少し手を加え、さも自分の作品のように公表しているのは可笑しいと、盛んに批判していた。しかし、保育者養成にかかわり始めた37年前からは、再話された昔話・紙芝居・絵本の価値にも気付かされた。かつ、昔話を音声言語で語れるのはもちろんであるが、私が育てた学生の語る紙芝居・絵本は、一味違うと言って貰えるように、教室空間で探求してきた。幼稚園教諭・保育士養成の、5領域の一つ

〈言葉〉も担当してきた。保育者養成5領域の中でも〈言葉〉は、他の《健康・人間関係・環境・表現》に比べると、なかなか捉え所の難しい領域である。ゆえに長年取り組んできた昔話研究を活用して、〈言葉〉の授業が出来るのではないかと取り組んできた。保育者と子どもは、語りあう関係であるべきであろう。とすると、かつて大人が子ども達に囲炉裏端で昔話を語り続けてきた空間を、保育室にも実現してほしい。

「伝承文学と民話」（2012年前期・1年生、57人受講）でこんな授業展開が起こった。授業初めから、4冊の絵本を語ろうと準備していた。その4冊とは、『ともだちや』『ひとりであんちできるかな』『はらぺこあおむし』『からすのパンやさん』である。

先ず、何故この4冊の絵本を、「伝承文学と民話」冒頭に導入したかを述べたい。

*子ども教育学科に入学して、先ず友達づくりを
と思い、『ともだちや』（内田麟太郎・文、降矢
なな・絵、偕成社刊）を選んだ。

作家・あさのあつこは〈学校〉を三点の要素で位置づけている。「学校は学力を高めるだけのところではない。人と出会うところ。こんな大人になりたいという人に会い、一生の友だちを作る。一方でけんかをし、人とぶつかる痛みを知る。そうすることで、生きていく『根っこ』が育つ」つまり、学校とは

○人と出会う所

○一生の友だちを作る所

○生きていく『根っこ』が育つ所

なのだ。子ども教育学科で学ぶ子供たちにとっても、このような場であればと思い、友達絵本

の一冊『ともだちや』を語ってみた。

- * 〈うんち・うんこ〉は、乳幼児期の子ども達にとって大人気の素材である。赤ちゃん絵本・仕掛け絵本『ひとりでうんちできるかな』(作・木村裕一、偕成社刊)を朝日新聞「旅する絵本〈パパあ、お尻ふいてえ!〉」(2007年7月25日)、宮迫博之さん『ひとりでうんちできるかな』紹介記事も活用して語った。
- * そして、2012年授業テーマの一つは〈絵本も伝承文学の一つである〉とした。この事を具体化する絵本は、『はらぺこあおむし』(エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社刊)・『からすのパンやさん』(かこさとし文と絵、偕成社刊)であった。授業準備をしている際、書店から貰ったカタログを見つめての発想を、授業展開導入に準備した。

『からすのパンやさん』はいっぺんに語るのとは大変な、長編である。絵本途中、たくさんのパンが2ページに渡って描かれている場面で終え、2回連続して語る形とした。その際「自分だったら、どのようなパンを作りたいか(食べてみたいか)」との発問をし、語り終えた。すると、(1)自分でパンをそれぞれ考えた事、(2)絵本を途中で語り終えた事で、その後の展開への期待感も倍加し、いつも以上に絵本語りを聴く集中度が高まった。かつ、絵本を語る環境としての天候も絡めてみた。『からすのパンやさん』を語った日は、どんよりとした曇り空であった。絵本素材・天候・聴き手・教室あいまって、聴き手のたくさんのエールを貰い、今まで語った中で一番の長編絵本にもかかわらず、気持ち良く語り終えた。この展開を実現できた一端は、全国の昔話を語ってくれた語り手から、身に付けさせて貰った〈語りの世界〉を、教室に出現させる事が出来たからだと思う。

さて、『はらぺこあおむし』を語る時がきた。この絵本には、手の平サイズ・普通版・大型絵本と、様々な形がある。その日に語る絵本は、授業が始まる前、白板に立てかけておく。英語版・B5判サイズ・手の平サイズの3冊を立てかけ、今日は手の平サイズを語ると予告した。学生のすわ

る場所は、不思議なもので3回目の授業ではほぼ固定化する。しかし、この日はいつも後ろの方にすわっていた女子学生が集団で前に席を取った。必然的に、いつもこの部分に座っていた男子学生が、後ろの席へととなった。授業、誰がどこにすわっているかで、教室の空気も変化してくる。『はらぺこあおむし』を語ったのは、梅雨時であった。しかし、晴れ間が見える中で語りたかった。すると雨降りの日なのに、晴れ間が見えてきた中で語れた。初めて『はらぺこあおむし』に出会う学生も居るであろうと思い、手の平サイズの絵本を語る前に、英語版も観て感じてもらった。すると、こんな感想を書いてくれた。「今日は、先生は『はらぺこあおむし』を語ってくれました。2冊あって、英語バージョンは何かを感じ取り、もう1冊はとっても小さな日本語バージョンを語ってくれました。すごく観ていてなつかしかったです。大好きな絵本の一つだったので!あの色使いに、小さい頃の自分は、興奮していたんだと思います。家で、もう一回読みたいです」

私はよく、〈観、聴、感〉を強調する。絵本や紙芝居に出会う時、しっかりと観て・じっくりと聴き・自分なりに感じ取ってほしいのだ。大学生活4年間とは、自分なりに感性を磨きあげ、子ども達と出会うための準備期間だ。今は聴き手である時を活かし、いずれ語る立場になる自分を、創生してもらいたい。手の平サイズの『はらぺこあおむし』を、60人弱の学生がどう受け止めてくれるか、語り始める前は心配だった。しかし、語り手が聴き手の状況をきちんと捉え、天候も活かし語ってみると、絵本の形も生きてくることを感じた一瞬だった。子ども教育学科の学生達の可能性を引き出す素材の一つとして、今後も〈昔話・紙芝居・絵本〉を活用したい。

2. ゼミを通しての語り手養成

子ども教育学科では、1年後期からゼミが用意されている。矢口ゼミの大きな柱は、二つある。一つは、昔話・絵本・紙芝居を素材とした、語り手の創生である。そしてもう一つは、年15回の〈国民の祝日〉を始め、正月・七草・節分・桃の節句・端午の節句・七夕・七五三・クリスマス等

の年中行事を、日常の保育で大切にしていける事を目指している。

では、絵本をどのような流れの中で4年間検討していくか、まとめてみる。

＊1年生《子ども教育入門ゼミ》

図書館内研修室で15回の授業を、6人の学生達と共有している。全てのゼミを、図書館研修室で行っている。目的の一つは、まずは図書館蔵書の絵本・紙芝居に出会う事である。そして出来るならば、蔵書絵本・紙芝居の完読も目指している。1年生なので蔵書絵本から一冊を選び、自分で書いてきたレポートを基に他の学生に「何故、この絵本を選んだのか」を紹介して貰っている。授業を重ねる毎に、説明の内容は、かなり充実してきている。選択する絵本は、他の学生が紹介したもの以外としている。半年だが、15回×6冊＝90冊となる。私も基本的には、授業時一冊は絵本を語る事を目指している。すると一年生が終わる時、100冊近くの絵本の「引き出し」が実現する。

＊2年生《子ども教育プレゼミ》

通年隔週15回を4人で、福音館書店・月刊保育絵本を月毎に検討してきた。〈こどものとも・こどものとも年中向き・こどものとも年少版・こどものとも0、1、2・かがくのとも・ちいさなかがくのとも〉を多角的に検討し、皆の前で語るまでを実践する。

＊3年生《子ども教育専門ゼミⅠ》

通年隔週15回を3人で、テーマを絞り込んで検討していく。2012年は、〈春〉をテーマとした。春から思い浮かぶ表現（花・食べ物・色・行事等）、どのような季節かも捉え、そこにどう絵本を絡ませていくかを具体化した。矢口ゼミは、紙芝居・絵本・昔話・語り・年中行事に興味・関心を持った学生が受講してくれている。4年次の卒業論文へと繋がる何かが掴めればと思い、取り組んでいる。

また、学生に〈選ぶ目・想像力・創造力・創意工夫・語る力〉養成のために、『猫物語』づくりも試みている。我が家には、2匹の犬・4匹の猫が同居している。その担当獣医より、毎年〈猫の日めくりカレンダー（猫とであえる365日・猫めくりCATS CALENDAR）〉をもらっている。そ

の猫の写真たちから発想したのが、『猫物語』を作る授業である。『猫物語』には、八つの過程が用意されている。

- (1) まず、自分が『猫物語』を作りたいと思わせてくれた猫の写真を選び出す。
- (2) 次に、その写真を生かす台紙を探し出す。台紙は、猫の写真そのものは薄いので、様々な形・厚みの紙を用意している。
- (3) 学生は、自分の選んだ猫の写真とじっくり対話・想像し、物語を作り上げる。
- (4) まずは一場面で『猫物語』を作るが、だんだんと複数の猫写真を選び、紙芝居形式の物語へと発展させていく。
- (5) 台紙の表に写真を貼り、裏に自分で作った物語を書きこむ。この際「矢口裕康・作、猫とじいじ」のように、作者名そして題名も、その物語を読み込んでつけてもらう。
- (7) ゼミ参加学生の前で、聴き手を考慮した立ち位置・持ち方も考え、自分なりに語る。
- (8) 自分以外の『猫物語』を聴き、受け止め、今後の物語作り・語り方に生かしていく。

私はかつて、短期大学で31年教えてきた。短期大学は、入学年と卒業年の2年間しかない。大学4年間でこそ実現できる、学生の得意分野確立を目指している。昔話研究に関わっている者として、学生と共に、何が自分の得意分野となりえるのかを具現化していける授業・ゼミを模索している。

3. 月刊保育絵本を保育に活用

子どもが誕生して、最初に出会う本は「絵本」である。また、保育所・幼稚園に通い始めると〈月刊保育絵本〉との出会いもあるかもしれない。月刊保育絵本は、通園児の保護者が園に注文し、毎月届く本である。書店で販売されている〈市販絵本〉との違いが、5点ある。

- (1) 原則、絵本作家による新作品である。
- (2) 市販絵本に比べて、安価である。
- (3) 市販絵本に比べて、本の厚みが薄い。
- (4) 原則その月の発刊絵本が売り切れたら、再版されない。つまりその時しか購入は出来ないかもしれない絵本である。

(5) 年度初めの4月に、原則12ヶ月・12冊一括購入予約する。その際、4月号以外はカタログ内容紹介のみで、出来上がった絵本を見ることは出来ない⇒絵本出版社（絵本作りの専門家）の目で企画・提案された、12冊の絵本と付き合い事が出来る⇒購入者の好みと違う本と出会える⇒12冊、自分では選ばない、様々な絵本に出会い手に入れる事が出来る⇒購入者の絵本選択の眼が広がり、変化する可能性も秘めている。

そして月刊保育絵本の内、書店で購入出来るのは、福音館書店（こどものとも）のみである。キンダーブック（フレーベル館）・ワンダーブック（世界文化社）・チャイルドブック（チャイルド社）・こどものくに（鈴木出版）・ひかりのくに（ひかりのくに）は、保育所・幼稚園を通してしか購入できない絵本である。しかし通園児の数を想像してみると、月間売上絵本としては、夥しい冊数になっている。子どもと保育そして月間保育絵本の関係も具体化していくと、保育者の世界は更に広がっていくはずである。

月刊保育絵本を編集している、ひかりのくに株式会社は園長への願いとして、次のような事を記している。

「子どもの生活環境の変化から、人とのかかわる経験が少なくなったことや生活リズムの乱れが指摘されていますが、絵本を楽しみながら、基本的な生活習慣・人とのかかわる力・考える力・思いやりの心が自然に身につくように心がけました。園はみんなで育ち合う場です。絵本からたくさんの驚きや夢や共感や感動が味わえるように、たくさんの話し合いが生まれ、そこからクラスみんなが育ち合い学び合えるように——そんな願いを込めて編集いたしました」との思いもきちんと受け止めて、子ども達へ月刊保育絵本を届けることのできる保育者を養成していきたい。

阿部恵は、『いつでもそばに保育絵本の楽しみ』（フレーベル館、2000年刊）で、月刊保育絵本をどう保育者が保育場面で活用していくべきかを提言している。阿部の視点から、二点具体化したい。《1》絵本は「読み聞かせ」より「語り聴かせ」

阿部は、「子どもたちを目の前にして、これから絵本を『読み聞かせよう』と思っている人と、

『語り伝えよう』と考えている人の間には、かなり隔たりがあります。あなたはどちらでしょう」と書き出し、〈語り伝え〉を意識して、保育者が絵本を楽しむことを提言している。

「『読み聞かせ』という熟語の中には、幼児よりも立場の上の人が読んで聞かせてあげるというような高圧的なニュアンスを感じてしまいます。『語り伝え』は、対等な立場で相手とともに語り、お互いの気持ちを伝え合いながら楽しもうというやさしさを感じます。そこで、私は絵本は『読み聞かせ』ではなくて『語り伝え』だと主張しています。特に豊かな感性が育まれる幼児期は語り伝えてほしいと願っています。描かれている絵本を子どもたちと読みとりながら、その反応をひとつずつ取り上げます。そして、子どもに合わせたことばで語ります。確認のために前のページに戻るのも、内容に関係のない話へと脱線してしまうことも大歓迎。なぜなら、すべては、保育者や友だち、お父さん・お母さんと絵本を楽しむ中で生じた状況だからです。その場の雰囲気がかもしだしたものに違いないからです。子どもたちの話が収まったところで、『さあ、お話を続けましょう。どこからだったかな・・・』と続ければよいのです」と説いている。〈語り伝え〉の姿勢から醸し出される、保育空間を実現すべきである。「語る」と「読む」、一概にそうとは言えないが、語るには双方向性、読むにはどうも保育者からの一方通行的側面が強くなる。私は〈語り伝え〉ではないが、〈語り聴かせ〉を唱えてきた。保育者が聴き手である子ども達の反応を踏まえ語りかけ、聴いて貰える空間を創り出した空間が〈語り聴かせ〉である。

《2》保育絵本はなぜ大切な

阿部は、保育絵本を保育の場面で生かしていないのは、保育者の心持ちしだいではないかと、指摘している。

「保育絵本をもうひとつ生かしてないと感じている保育者に、その理由をたずねてみると、次のようにまとまります。①時間がない。②他にやる事が多くある。③保育絵本の扱い方がよくわからない。④おみやげ的な使い方しか知らなかった。⑤面倒だ。（中略）結論は簡単です。積

極的な思考に切り替えることです。①せっかくだから、時間を作って保育に生かしてみよう。自分の保育を見直すいいチャンスになるかもしれない。②やることは多いが、保育絵本もそのひとつに加えて、短時間でも楽しもう。自由に見れる環境を作って子どもの力に期待してみよう。③扱い方は未熟だが、いろいろ試して自分なりの生かし方を研究してみよう。(中略) 保育絵本を生かして楽しい保育をしよう！この決意が大切なのです。残りの④は、保育絵本はおみやげではない。⑤は論外のような気もしますが、保育や子育てそのものが、簡単でないことに気づいてほしいものです。面倒がらずに、最初は子どもたちが興味をもったところをいっしょに楽しんでみてください。子どもたちの興味や関心を素直に受け入れるだけでも保育絵本は生かされているのです。どの保育絵本も、子どもたちや保育者、お父さんやお母さんを苦しめようなどと思って作られていません。保育の子育ての良きパートナーになるべく、日夜努力しているのです。『生かす』『生かせない』は、あなたの心持ちしだいです」

保育者が月間保育絵本に対して、〈パラパラ絵本・お土産絵本・お持たせ絵本・お持ち帰り絵本・置きっぱなし絵本〉にしている事がある。そうではなく、保育者そのものが、一月毎の保育に、月刊保育絵本を活用するとの立場に立てるかどうかが違って来る。

阿部は、月刊保育絵本を家庭と園を結ぶ“シャトル絵本”へとも提言する。「一度、パラパラと見ただけですぐに家に持ち帰らせてしまう“おみやげ絵本”にしたり、園におくだけの“置きっぱなし絵本”にしないことです。園と家庭の間を、子どもたちが何回も持ち運ぶ“シャトル絵本”にしたらどうでしょう。すると、園から家庭に絵本の楽しさが伝わるだけでなく、家庭から園にも絵本を介しての楽しい話題が、子どもたちや保護者から返ってきます。園と家庭、保育者と家庭の信頼関係もいっそう深まることになります」

阿部の言葉を借りれば、家庭と園の連携を図る“シャトル絵本”として機能すべきである。園(保育者⇔月刊保育絵本⇔子ども達)⇔家庭(子ども達⇔月刊保育絵本⇔親達)の連続性あつての日常

の保育は、子ども達の持っている可能性を更に引き出していくに違いない。

4. 月刊保育絵本と授業

私の担当する授業では、『謎謎なあーに』を導入している。「謎謎」は、学生の持っている二つの可能性、《聴きとる力》《想像する力》を引き出すことが出来る。

2012年9月1日『ヒコリみなみのしまにいく』(いまきみち・作)「こどものとも年中向き」9月号(通巻318号)が発刊された。福音館書店・月刊保育絵本を継続して購入してきた私は、この絵本以前に発刊されたヒコリ絵本を、2冊持っていた。この3冊のヒコリ絵本・謎謎なあーに・保育の兼ね合いを込めて、2年生後期の授業〈保育内容指導法・言葉〉で活用してみた。

ヒコリ絵本は、ヒコリと船乗りのおじさんの会話の中に謎謎が組み込まれているのが特徴で、〈謎謎絵本〉と名付けた。

では、3冊のヒコリ絵本にはどのような謎謎が取り上げてあるか、列挙してみたい。

*『ヒコリふねにのる』(こどものとも・2005年10月号)

- ・ 昼は消え、夜咲く花は な～んだ
- ・ 人でないのに二本足で歩き、海の中もスイスイ泳ぐもの な～んだ
- ・ 水を吹き上げるけれど、噴水でないもの な～んだ
- ・ どうしてもたためない空の布団は な～んだ
- ・ 音は聞こえるが目には見えないもの なあに
- ・ 七色をして、空に大きく架かる橋は な～んだ
- ・ 雷でないのにゴロゴロ鳴るもの なあに
- ・ おじさんみたいにいつも行ったり来たりしているけれど、必ず帰って来るもの な～んだ

*『ヒコリはたけにいく』(こどものとも・2008年8月号)

- ・ 行ったり来たり、でも必ず帰って来るもの なあに
- ・ 物を食べないのに歯が生えていて顎鬚があるもの なあに
- ・ 土のベットで寝て、シャワーを浴びたら目が

覚めるもの なぁに

*『ヒコリみなみのしまにいく』(こどものとも
年中向き・2012年9月号)

・背が高くてたくさんの水筒を持っているもの
なぁに

・手も足もないのに、素早く動き回るもの なぁ
に

・目には見えないけれど居る事が分かるもの
なぁに

・椰子の木のように高く、お空のように丸いも
の なぁに

・風を食べて空高く上がるもの なぁに (注)1

授業では、学生に様々な力を引き出すため
に、

○先ず音声言語で、それぞれの謎謎を問いかけ
る。謎謎を解こうにも、聴き取らなくては答え
に至らない。かつ授業記録にも、聴き取った謎
謎を書きとめてもらう。

○謎謎の答えを考えるヒントとなるので、学生に
絵本の絵だけを見て貰い、ゆっくりとページを
捲っていく。すると、学生達は絵から絵本世界
を感じ、想像する。

○その上で、絵本中、文字の謎謎の答えは伏せ字
の形とし、学生達に語ってみた。

以上のような授業展開から、学生達の聴く力・想
像力が磨かれた。

月刊保育絵本を保育で活用する視点を、かつて
『語りを現代に—ことばではぐくむ子どもの世界
—』(エイデル研究所・1998年刊)で、5点提示
した。

(1) 乳幼児期に必要な糧の一つとして月刊保育絵
本が作られ、配られ、与えられる術を見いだし
てみたい。絵本のみが、乳幼児期に必要な糧と
は思わない。しかし、絵本もその一つとなり得
る可能性をもっているはずである。

(2) 保育者が、園のカリキュラム上必要不可欠な
ものとして、月刊保育絵本を位置づけてみる。

(3) 年間の保育を展開するうえで、月刊保育絵本
の活用法・知恵を出し合ってみる。

(4) 月刊保育絵本を、どのように子どもの保育と
結び付けるか、活用する方法を見出してみる。

(5) 家庭での、読書指導の一助として活用してみ

る。また降園時の保護者との話題の一つにもな
る。(注)2

以上、授業ではこのような保育展開が可能ではな
いかを、学生達と究めていきたい。

5. まとめとして

子ども教育学科は、2013年度完成年度へと入る。
3年間〈語り手の創生〉を、学生達とゼミ・授業
を通して具体化してきた。その一端を、

○昔話研究と保育者養成

○ゼミを通しての語り手養成

○月刊保育絵本を保育に活用

○月刊保育絵本と授業

の4つの視点からまとめてみた。2013年度授業
「子どもと民話」(4年生・前期)「子ども教育専
門ゼミⅡ」「卒業研究」(4年生・通年)で、更な
る語り手の創生を、学生達と具体化していきたい。

(注) 1

謎謎絵本3冊の「謎謎なぁーに」答えは、

『ヒコリふねにのる』

星・ペンギン・鯨・雲・風・虹・猫のみみちゃ
ん(ヒコリが飼っている猫)・渡り鳥

『ヒコリはたけにいく』

渡り鳥とおじさん・玉蜀黍・種

『ヒコリみなみのしまにいく』

椰子の木・魚・風・月・風

(注) 2

「月刊保育絵本とは何か」p 200～p 211